審査結果の要旨

氏名　大田俊寛

本論文は、古代世界のグノーシス主義を、広義のプラトン主義、キリスト教正統思想と並ぶ一つの独自な宗教思想類型として捉えることを意図した意欲的な試みである。近年では、いわゆる本質主義的概念構築への批判と、宗教史的個別研究の進展の狭間で、グノーシス主義という概念自体の有効性への疑念も提出されているなかで、著者は独自の視点からグノーシス主義に特有の思考法を剔抉し、その一種の再定義を試みている。

その際に注目されるのが「模倣」という観点である。「模倣」のあり方および評価をめぐって、プラトン主義およびキリスト教正統主義との差違を際だたせるのである。約言すれば、いわゆるプラトン主義においては、世界制作者デーミウルゴスは、超越的イデア界の美しさを妬むことなく、それを讃えつつ「模倣」して世界を造る（第一章）。グノーシス主義の世界観においても、この世界は最高神を頂点とする超越界たるプレーローマ界の「模倣」として捉えられるが、それは、悪霊どもがプレーローマ界の美しさを妬み、それを不当に「模倣」して生み出したとされる。この相違によって、この世界は妬みと悪意と不正に満ちた性格を帯び、グノーシス主義のいわゆる世界憎悪が結果する（第二・三章）。キリスト教正統主義との対比は、おもに聖典（神的啓示文書）の正当性をめぐる思考の対比によって摘出される。キリスト教においては、聖書の言葉の真理性は、教会共同体内の公共の儀礼によって見えるかたちで最終的に保証されるのに対し、グノーシス主義集団にあっては、聖典の文言にもつねに悪霊による悪しき模倣（剽窃）の可能性を排除できず、救いをもたらす真理の言葉を悪霊の剽窃から守るための限りない秘教化、秘儀化が結果する。が、これは、宗教集団としての統一性、永続性をもたらすことができず、つねに小集団として簇生・消滅を繰り返す他はなかった（第四章）。こうした類型化を説得的に行うために、本論文では、「模倣」に関してイコンとシミュラクルを区別するドゥルーズの議論、また「妬み」に関してはフロイトやラカンの自己意識生成論を大胆に援用し、理論構築の重要な補助線としているが、この方法論的冒険は一定の成果を挙げている。

このような方法論的冒険に基づき、斬新な仮説を提出する本論文には、箇々のテクストの読解に関して、また宗教思想の理念型的類型化と歴史的実態との関係について等、さらに丁寧な検討を要する点が少なからず見いだされる。が、マニ教やマンダ教を含めたグノーシス主義、中期および新プラトン主義、キリスト教教父の諸文献を博捜し、それらに通有の思考法を斬新な視点から整理して、新たな宗教思想類型論を明晰なかたちで提出する試みは概ね成功していると評価できる。精神分析理論とグノーシス主義の諸神話との平行性の指摘は、有望な研究視点を提出するものといえよう。こうした評価に基づき、審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位授与に値するものと判断した。